【郷土史への扉】

「上野原縄文の森」開園十周年記念
縄文時代の魅力

「上野原縄文の森」は今年の十月で開園して十周年を迎えます。今回は縄文時代について紹介したいと思います。

縄文時代とは

そもそも「縄文時代」とは、いつごろでどのような時代だったのでしょうか。

縄文時代は一般的には、今から一万三千年前から二千三百年前までのことを言い、旧石器時代と弥生時代に挟まれた時期を縄文式土器の変化によって大きく六つ（草創期・早期・前期・中期・後期・晩期）に分けています。

私たちは時代の区分を一般的には人々の営み、すなわち、国の成立、支配者の交代、社会・文化の変化よって分けていますが、旧石器時代から縄文時代への移り変わりは、自然環境の急変動という非常に大きな変化がありました。

上野原遺跡で発見された丸と四角の口をした壺形土器。２つならべて埋められていた。

縄文時代のはじまり

旧石器時代から縄文時代への移行期は、最後の氷河期である「ウルム氷河期」から温暖期に向かう気候変動の時期で、植生も針葉樹から落葉広葉樹へ交代し、日本列島も海水面が急速に上昇して大陸と分離していきました。

この急激な環境変化によって、これまで生息していたマンモスやトナカイなどの大型哺乳動物が絶滅し、小型哺乳動物や木の実、魚介類が多く取れるようになったことで、人々の暮らしは狩猟による移住生活から狩猟採集による定住生活に替わりました。また、狩猟する動物（小型動物・魚介類）の変化によってさまざまな道具（石器、釣り針、銛（もり）、網など）が考案され、採取した木の実などを保管したり、煮炊きするために土器が発明され、地域によってさまざまな形の土器が作られるようになりました。

上野原遺跡の登場

その定住化が南九州から始まったのにはそれなりの理由があります。

先にも述べたように、旧石器時代の終末期は、最終氷期の名残で気候は寒冷で、日本列島は針葉樹に覆われていました。縄文時代に入り、温暖化が進んでくると、低緯度に位置している南九州から落葉広葉樹の森が形成されていきました。

この自然環境の変化が、落葉広葉樹が持つ高い植物性食料（木の実）の供給力によって定住生活が可能となり、上野原台地に人々が住み始めました。

その後も温暖化が進み、落葉広葉樹の森は東日本へ、そして北日本まで広がっていきました。その結果、縄文文化は青森県の三内丸山（さんないまるやま）遺跡を代表とするように、東日本で大きく花開いていきました。

縄文人に学ぶ

縄文時代は約一万年続きますが、その間一貫してきたことがあります。

それは「自然との共生」です。日本各地に残っている縄文遺跡からは「自然の恵みに感謝し、そして敬う」という縄文人の心や息吹きを垣間見ることができます。

弥生時代以降は、稲作などの農耕社会となり、人々は自然との共生から、自然の征服へと考え方を変え、自然破壊を繰り返すこととなりました。

上野原遺跡や三内丸山遺跡をはじめとした縄文遺跡は、数千年の間、自然災害などから壊されることなく今日まで保存されてきました。これは、縄文人が津波や河川の氾濫、土砂崩れがない安全な場所に暮らしていたことを現しています。

私たちは、東日本大震災や集中豪雨などによる水害など自然災害に被災してきました。自然の猛威の前では私たちは無力です。今一度、縄文人の心や生き方を上野原縄文の森で学んでみてはいかがでしょうか。

文責＝鈴